

遅い歩みの中から新しい能力も

私と同じような病気をし、マヒという後遺症を持つ方なら、リハビリの成果は実に微々たるもので、その歩みも遅いということは、先刻ご承知であろう。私のこの記録も、発病後五年をへたいま整理してみると、回復は一進一退を繰り返し、そのつど、一喜一憂してきたものだと、つくづく感じさせられる。

しかし、見方を変えると、「かなりドラマチック(?)なこともあったなあ」という感も深い。

例えば、左手で新しい書体に挑む楽しみを得たことなどは、その最たるものである。リハビリの本筋からいえば、右手の機能回復が第一の目標だろうが、その右手が不自由なおかげで、六十年間、大して重要とも思わなかった左手に未知の能力を発見したわけである。発病しなかったら、私は一生、私の「才能」に気づかずじまいだったに違いない。

「よきかなりハビリ」とまでは、とうてい思えないが、リハビリ生活で知った喜びも少なくなることには確かである。健康な人にとっては些細なことかもしれないが、小さな喜びを見過ごさず感じられるようになった自分に、いま私は大きな喜びを感じている。

国東の仏・三百五十の石段を登る

平成元年の九月は九州で古い友人と過ごす日が多かった。ずっと心にかかっていた学徒動員の記録文集を私が言い出して旧友と作り、完成の会も開くことができ、私の気持ちは軽かった。この機会に兄夫婦といっしょに国東半島に行き、その古い仏教の遺跡を訪ねることにした。国東については何も知らず、ただ多くの古い優れた石仏が残されているところ程度の知識しかなかった。

国東半島は中央に山の頂があり、両子寺の近くまで来ると俗世間の塵は全くなく、空気が澄んでいる。私より一回り上の兄夫婦はいろいろと気をつかってくれた。山が深くなり、参道が見えたところで車を降りる。少し歩くと参道の向こうに突然、千年の風雪に耐えて寺を守っている仁王様が現われた。苔蒸した石の仁王様が力強く左右に一对、有無をいわせぬ迫力で突っ立っている。その仁王様ににらまれながら、私は長い石段を休み休み、登りきつてようやく本殿にたどりついた。私は長い石段を登りきった喜びと、仁王様に会えた満足感とで、汗を拭いながら初秋の風を楽しんだ。周囲には真っ赤なまんじゅしゃげが美しかった。

国東に来たからには、あの写真でしか見たことのない熊野磨崖仏に参詣し、カメラに収めたかった。そのくせ私はそれがどんなところにあるのか知らず、車を止めたらすぐ見えるところにあると思っていたのである。

「せっかくここまで来たんだから行きましょう」と、わがままな主張をして車を走らせてもらった。

「変だな、杖なんて、そんなに長くてどうするのかな」といぶかりつつも、私の身の丈ほどの、長くて丈夫な竹杖を探して登り始めた。なだらかな傾斜の坂道に石段がゆるく造つてある。名物の「三百五十の石段」は天狗が一夜のうちに積んだ石段だそうだが、この分では大したことないだろうと安心して歩く。竹杖は長いので、手の握りよりも上がうんと余っている。

「よし、一気に登ったれ」と妻に三脚を持ってもらっている私は気楽なものだった。坂道が次第に急になって、歩く姿勢が少し不安定になってくる。「まだかなあ」と思うころには、カメラも妻が持ってくれた。やがて鳥居があり、上を見上げると、垂直かと思うほどの急傾斜に石段が積まれている。

いや、石段というよりふぞろいな潰け物石が斜面に転がしてある、そんな感じだった。

「ありがとう」

「と言つて手ごろな長さの竹杖を取ると、

「だめだよ、もつと長くないと」

と大きな声で言う。

「変だな、杖なんて、そんなに長くてどうするのかな」

といぶかりつつも、私の身の丈ほどの、長くて丈夫な竹杖を探して登り始めた。

なだらかな傾斜の坂道に石段がゆるく造つてある。名物の「三百五十の石段」は天狗が一夜のうちに積んだ石段だそうだが、この分では大したことないだろうと安心して歩く。竹杖は長いので、手の握りよりも上がうんと余っている。

「よし、一気に登ったれ」と妻に三脚を持ってもらっている私は気楽なものだった。坂道が次第に急になって、歩く姿勢が少し不安定になってくる。「まだかなあ」と思うころには、カメラも妻が持ってくれた。やがて鳥居があり、上を見上げると、垂直かと思うほどの急傾斜に石段が積まれている。いや、石段というよりふぞろいな潰け物石が斜面に転がしてある、そんな感じだった。

「なるほど、これが天狗の造った名物の『三百五十の石段』なのか、参ったな」と休んで、一息を入れた。石段は私を威圧するように見下ろしながら「挑戦するかね」と私に問うた。すかさず妻は「こちらで戻りましょうか」と声をかけてきた。兄夫婦は黙って私たちのやり取りを見守っている。垂直に見える石段の挑戦にこたえる力が私にあるか、それとも戻るか、思案した。

「えーい、行こうっ」と言うなり、私は杖をついて、「よいしょ」と一段登った。次の石は私の足先を乗せる幅しかない。足の筋肉が発達していたときは、この幅で十分に体重を支えられたかもしれないが、今の私の足にそんな力はない。あたりを見渡して、石を積んでいない傾斜面に片足を乗せて、次の石段に一気に体重をかけていく。妻は私の後ろに続きながら、心の中では、いつ断念をしたらよいか考えていたそうである。兄夫妻も妻といっしょになって、私に励ましの声をかけてくれる。

息が次第に荒くなってきた立ち止まったが、狭い石段の上では休息もとれない。やむをえずまた歩き始める。

「だめかなあー、ここまで来たのに残念だなあー」と心の中に引き返すことも考えながら一段を登る。「もう、限界だなあ」とまた一段登り、そろそろタオルを投げて「もう帰ろうよ」と口にしなかったそのときであった。上のほうから登山者の明るいきやかな声が聞こえてきた。途端に小鳥の「ケキョケキョ」というさえずりも聞こえてくる。

「もう一息だ。注意して最後まで登ろう」

足元はすこし乱れがちになっていたが、ようやく目的地に着く喜びに気持ちを振り直し、必死にな

って最後の数段を踏んで石仏の前に出た。そこには、おだやかな表情をたたえた「大日如来」と憤怒の「不動明王」の巨大な石像が石崖に彫刻されてあった。幾百年の間、無言で山の奥深くたたずんできた仏像を仰ぎ見て、同行のみんなに感謝しつつ、念願の大石仏の写真を撮ったのである。

やがて帰途について、初めて身の丈よりも長い竹杖が必要なのがあった。石段の一段下を杖で突くと段差が大きいので、その分長い杖でなくてはならなかったのである。

登るときはただ、肉体の限界に挑戦することだけを考えていたが、下りは目の前が深い谷で、そこに通じる狭い石段を竹杖を突いて下りるのだから、谷底に転落したらという恐怖があった。それを警戒すると身体の重心が後ろに残り、何度か石段の上に尻餅をついた。そのたびに妻は、腰のベルトを引っ張って私を支えてくれた。兄も、妻とは反対の側から私のベルトを握ってくれた。私は右と左から腰のベルトを支えられ、長い杖を精いっぱい使いながら、ようやく無事に下り終えたのである。

夢のような無謀な山登りであった。すばらしい石仏の写真は後日、全紙大に引き伸ばし、書齋に飾った。今も私を見守ってくれている。

今回の体験は、写真でしか知らなかった石仏を私のカメラに収めたいという、強い希望が助けとなった。私がかし前もって、この石仏が高く険しい山の上にあると知っていたら、たぶん「やめよう」と言ったに違いない。それは、私のリハビリの基本が「絶対安全」だからである。けがをして歩けなくなるのが私には最も怖いことなのである。今回の「安全」は、兄と妻が私を支えてくれたおかげで確保できたのだが、結果として「やり遂げた」という体験は、私に大きい自信を与えてくれたのであった。

そのとき妻は

国東の石仏を見にまいりましたころには、夫の足の力もかなり確かになっていて、歩行も安定していましたので、だいじょうぶだろうと思っていました。

それまでも、丹沢のダムの下から上まで坂道を登り下りしたり、日向薬師の参道も歩けたし、大雄山の石段も、本殿までお参りで来ておりましてから、私も変な自信を持っていたのです。

ところが、当時の夫をご存じの友人から、「国東の磨崖仏はとても無理でしょう」と忠告されましたので、私も少々不安になりました。

実際に登りかけてみますと、途中からほんとうに目の前の坂が、急に壁のように見えてきました。これは「登りはいいが、下りるときは前にのめって、とてもむずかしい」と、私のほうが先に心配になり、「戻りましょう」と言いました。

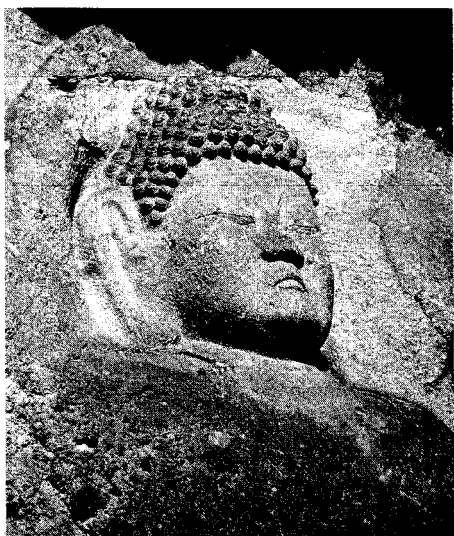
もし、けがでもしたら、取り返しがつきません。でも夫からは、なんの返事也没有ませんでした。やはり登りたかったのです。

無事に如来像と不動尊像を仰ぎ見ましたとき「あよかった」と安堵したのはもちろん、やはり仏様のご加護があったのだと、強く感じました。

下りは、思ったとおり大変でした。兄の力を借りても必死でした。何事

もなかったからよかったようなものの、夫がやりたいと言っても、私が止めるべきものは止めなければいけないと、反省もしました。

やはりこの無謀な試みは、どなたにも、お勧めできるものではありません。でも、そのとき撮った如来様の微笑むかのようなお写真を見ると、私も苦しさや恐ろしさより楽しさやうれしさばかり思い出されるのですが。



決死の思いで撮った傑作、国東の磨崖仏。

新たな目標へリハビリ五カ条

子供のころから私は音楽が好きだった。

仕事に行き詰まり、気持ちが悪く落ち込むと、ペー太郎の「運命」を聴き、彼の苦闘をしのび、勇気づけられた。ところが、発病後しばらくは後遺症によって右手が使えず、レコードの操作ができなかった。第一、レコードを取り出すために腰をかかめることもできないし、手を前に突き出すこともできない、やむをえず左手でレコードジャケットを取り出しても、今度は左手一本ではジャケットからレコードを出し入れすることもできない。ターンテーブルに正しく乗せて操作することもできなければ、表面の汚れもぬぐえなかった。

人間の生活は必ず両手を必要とするようになっていく。狩猟や農耕の器具をはじめ、あらゆる文化の所産が「両手を基本」にしてでき上がっている。片手しか利用できなくなった中途障害者は、この問題をどう解決したらいいのだろうか。

左手の訓練により、左手で食事はできるし、CDの登場で旧式の古いレコードは捨ててもかまわない。しかし、書物が左手一本で扱えないのは問題であった。片手で本を持って、開いたページをもう一方の手で押さえなければ、ページが返ってしまい、読書は不可能に近いことに気がつき、がく然としたのである。

書類の中から特定の事項を探し出すなどという少々高級な仕事は、遠い将来の解決課題としてゆっ

くり取り組めばいいが、読書できないと、大事な情報が入手できなくなるので、再起を志す私には大きな衝撃であった。なんとかしてこの対策を考えなければいけない。読書ができないと、私の精神生活はますます低下し、ついには心も活動しなくなるのではないか、という恐怖があった。私がいちばん恐れていたのは、徐々に「精神生活のマト」がにじりよってくることだった。

ちょうどそんな悩みを持ちながら、六十三年五月、泉睡会の会員とバスで芦ノ湖まで出かけた。この年は春が遅く、湖畔はまだ雪があつて寒く、散歩も無理な状況であった。

昼食のとき、私の同年配のある会員が、周囲の人々が談笑しているのを眺めながら、「リハビリなんて、しよせんやる気の問題なんだ」

とつぶやいているのを耳にした。その会員はかなり言語障害が残り、会話にも多少の不便がある人だった。その人のとつとつとしたつぶやきは、前に述べたような悩みに突き当たっていた私の心に深く響いたのである。

それから私の工夫が新しく始まった。何も努力しないで「障害者ですから私にはできません」という逃げ口上は嫌いだ。

そこで自分の動きを注意深く眺め、「なぜお箸で食事ができないのか」「なぜレコードの操作ができないのか」「なぜ読書のときに困るのか」の三点に課題を絞り、その原因となる動きを分析した。その分析結果を大川先生に教えていただいた方式に当てはめて訓練計画を立てて実行することにした。

第一に、肘から先の筋肉を強くすること、特にねじり運動ができることの訓練である。これには徒

手体操と、浴槽の中での屈伸運動しかできなかった。

第二は、肩の大きな筋肉を強くして、「腕が重く感じない」程度に力をつけることである。徒手体操では、肩を上下前後に動かしたり、腕を水平に上げ下げする。風呂の中では水泳の犬かきの要領で右手でお湯をかき、水の圧力を利用してその抵抗を感じながら少しずつ力をつけていった。その他、利用できるものは椅子でも机でもなんでも利用して、縮んでいる筋を伸ばす運動をやった。一キロの鉄亜鈴を買ってきて、腕や指に力をつけたり筋を伸ばす訓練にも使った。

第三の訓練は、病院でもらう錠剤シートのミシン目を、一日かけて切り離す作業である。初めは全くできなかった。右の親指と人差指の指先とでシートが挟めず、親指と人差指の関節あたりにシートを挟むのが精いっぱいだった。しかし、少しずつできるようになり、やがて親指は人差指の指先をしつかり押さえ込むことができるようになった。それ以来、三週間ごとに塩田先生から薬をいただく日が楽しみになった。前回はこのくらいの作業しかできなかったが、今回はどのレベルの作業ができるかな、こんな、人の知らないある種の秘密の楽しみを持ちながら訓練を続けた。

第四には、手首の関節を柔軟にするための、ラップの芯の丸筒を利用した運動である。これは前にご紹介したとおりである。

第五には、たっぷりの睡眠と適度な運動、健康によい食事と悪習慣を改めて摂生を保つ生活、心の安定を保ちながら、運動のし過ぎによる過労と余病の併発を絶対に避けるということ。

どんな運動でも、私の回復の度合いに応じて、筋肉に少しは無理をさせるが、筋肉が疲労しないよ

う、つらくなるような運動は避けた。

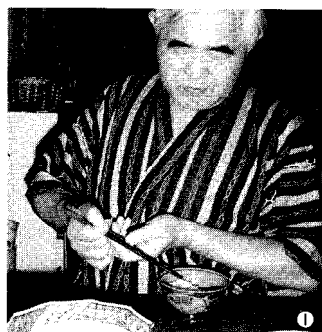
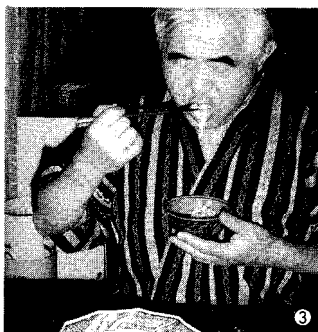
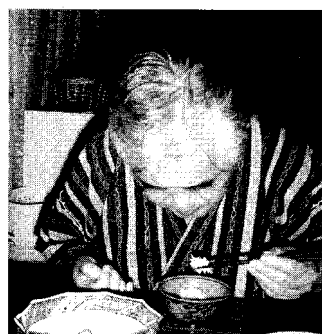
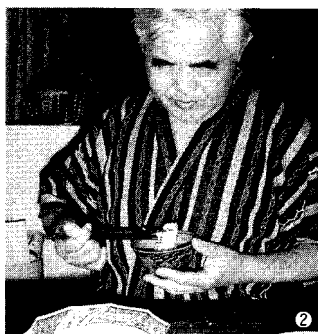
特に先輩の話を聞くと、リハビリで膝の関節を痛める方が多いようだ。その原因は、マヒの足をかばって歩くために、よいほうの足に過重な負担がかかり、過酷な労働を強制されることが大きな理由だそうだ。いずれにせよ、残っている筋肉がどれほど小さくても、大事に鍛えて育ててゆく必要がある。小さく細くなっている筋肉を傷つけないように気をつけるのは本人にしかできないことなのだ。自分がちょうどよいと思う運動がその人にとって適切な運動なのかもしれないと思う。

右手でお箸が持てた

かくて一年の歳月があつという間に過ぎてゆき、平成元年の四月、右手にこわごわとお箸を持たせてみた。何度目かのトライでようやく右手の指がお箸を持った。それは決して正しい握り方ではなく、握ったというより指の間に挟んだといったほうが正しいかもしれない。しかしいずれにせよ、曲がりなりにもお箸が握れたのだ。

右手がお箸を握り、左手が茶碗を持った。肘の筋肉が腕を持ち上げ、次に手首の関節が内側に90度回転してお箸の先が茶碗の中に入った。お箸の先を左手でそっと直してお箸が乗りやすいようにするが、ご飯はなかなか乗らない。でもようやく五、六粒のご飯がお箸の先に乗った。そのご飯をそっと、そっと、こぼさないように肘の筋肉が持ち上げる。

次に手首の関節がぐるりと回ってお箸の先が私の口元に近づく。「もうすぐだ」首が前に突き出て迎



●右手で食事ができるようになる



右手にお箸が持てるようになるには時間がかかった。左手で食事をしていたときは、姿勢も悪かった(右上)。①まず右手に箸を持たせ、②手首の関節を回して食べ物をつまむ。③口が迎えに行かないよう、姿勢を正して手を上げる。

◀指先の訓練に意外に役立ったのが、薬のシートのミシン目を切り離す作業だった。

えに行こうとするのを必死の思いで制して、手首の運動にまかせる。とうとう、お箸は口に届いたのだ。ついに右手で持った箸が四十二カ月ぶりに私の口に食べ物を運んだのだ。

「晏子、見て」

私に言われるまでもなく、妻は私の成功を祈りながら、私に気づかれないように見ていたらしい。「よかったですね」

万感を込めた夫婦の会話は言葉も少ない。ともに闘った二人には言葉は不用だった。

万歳！ 感激。ありがとう。両親にももらったこの手が回復した。

次に左手に味噌汁の椀を持ってみた。中の豆腐が小刻みにふるえて見えた。右手で中の豆腐をつまむことはなかなかむずかしいが、うまく箸の先に乗って口に運ばれてきた。右手で食事することがこんなにすばらしいことだったとは。

これと並行して平成元年の四月からは、右手の親指が仕事を覚え始め、読書のときに開いたページを押さえることが可能になった。なんとという喜びだろうか。これで私は従来とは比べものにならないほど、楽に読書ができる。しかも、親指と人差指でレコードの縁を支えることにも成功したので、古い懐かしいレコードに耳を傾けることもできるようになった。もっとも、レコード針を求めるのには一苦労したが……

小さな挑戦に連続して成功を重ね、自信を失っていた私にも再び自信がわき始めてきた。

北国では五月になると、何もかも一度に春が押し寄せて、野も山も緑があふれ、色とりどりの花が咲きこぼれる。桜も桃も梅も一度に空を仰いで、「春ですよっ」と叫んでいる。少し大げさではあるが、今の私はこれにも似た想いであった。

心の中で「ありがとう、晏子」と、妻に感謝の言葉をつぶやいた。と同時に、私に挑戦するきつかけを与えてくれた仲間の存在をありがたいたと思った。もし、健康な人が「やる気の問題……」だと言っても素直に受け取ったかどうかかわらなかつたと思う。同じ立場の人の意見だけに私は素直に聞けたのではないだろうか。

これからは「できる」段階にまで進んだ力を、毎日の習慣で「いつもする」水準にまで引き上げなければならぬ。だから「できる」というだけで満足してはいけぬと自分に言い聞かせている。

その後のカメラマンぶり

健康な時代には両手を使ってカメラを構え、一瞬のうちに移り変わる光を追いかけて、ファインダーをのぞきながら次々にシャッターを切りつづけた。「へたの鉄砲も数打ちや当たると言われかねないような写し方で、三十六枚のフィルムもあつという間に撮り終えたものだった。

しかし病気をしてからはずっかり変わったというより、変わらざるをえなかつたのである。重たい旧式のカメラをひもで首からつるし、左手でカメラが持ちやすいように、胴体の長い重い百五十ミリズームレンズを常に装備している。そのかわり予備のレンズとかアクセサリーの類までは持てないの

でカメラだけを持ち歩く。

すばらしい被写体に出会うと、適当な場所にたどりつき、位置ぎめをするのに、一步一步と足場を選びながら近づく。ようやく適当な位置を占めたら、対象に「こんにちは」と声をかけながら改めて魅力のポイントを探す。

しかし、どんなに注意したつもりでも、不注意から「しまったッ」と思うことがある。忘れもしない一昨年秋のこと、美しい光に気をとられ、自分が片マヒで不自由な体であることを忘れてしまい、首から下げたカメラのファインダーに目を当てたまま、思わず二歩三歩とその姿勢で前に進み出てしまった。私の左の靴先に葛のつるが引っかかっているのに気がつかず、弱い右足に体重をかけ、左足に体重を移動させようとした。そのとき、左足は葛のつるに取られて前に出てこれない。弱い右足を計算外の体重がかかって、右足は少しずつ萎えてくる。

「危ないッ」と思って、とっさにカメラを遠くに投げた、体はゆっくりとそのままの形で倒れていく。「残念だッ、せっかくのリハビリもこの転倒で台無しになるのか、くやしいッ」ドスンと鈍い衝撃音を伴って地面に倒れた。健康なときなら、手を突くか膝を突くかして衝撃をやわらげるが、片マヒではそれができない。弱い右足から崩れ落ちていたので、大地に右を下にして寝ていた。意外と大地が軟らかいことに気がついた。

「けがは？ 骨折は？」そーっと左手で下になっている右の肩と腕をなでてみたが、けがはしていないようだ。足も骨折はしていないように立ち上がった。放り投げたカメラを拾い上げて泥を払い、二

度とこんな不注意による事故は起こすまいと心に誓ったのである。

それ以来、花に近づくときは十分に足元を見て近づく。フアインダーで遠くからのぞいても、のぞいた姿勢では決して歩かないことにして花に挨拶をする。私の挨拶に対してツンとする花もあれば、「うれしい、美しく撮って」と笑顔を向ける花もある。私は「きれいに撮ってあげるよ」と話しかけながら、最も魅力的なアングルと光を選ぶ。左手でカメラを持ち上げ、親指と人差指でレンズの長い胴体を上からつまむ形で持ちながら薬指一本で距離を合わせる。いったん、カメラを下ろして絞りを修正、持ち上げてズームの調整をする。再度カメラを下ろして指の位置をずらせて今度は親指と薬指でカメラを持ち、人差指でシャッターを押せるようにして構え、呼吸を止め、ぶれないようにしてシャッターを押す。カメラを下ろしてフィルムを巻き上げてワンショットが完了するのである。

一枚のフィルムにも、花との長い会話が込められているのだ。そしてその分、花も最高のサービスをしてくれていると思う。こんなふうにして一枚一枚の写真を撮るから、フィルム一本を撮り終えるにはそうとう時間がかかるのである。

左手で隷書に挑戦

平成元年の年末に大田仁史先生のリハビリについての講演会のお話を、私たちの泉陸会報で紹介するために整理していた。大田先生はその中で私たちに「価値観を切り替えて生きることの大事さ」を説き、そのためには「自分を客観的に眺める」ことが必要であるとおっしゃっていた。しかし実際問題と

しては、何をしたらよいのか、私はまだ迷っていた。

平成二年の正月、泉陸会の新年例会には西村利子先生に来ていただいて、恒例になった書初めをした。私は右手に筆を握らせ左手で右手首を押さえ、どうにか書き終えた。先生のお手本に似せて書き上げた書初めは、形は整ってきたが力の乏しい字で、どことなく不満な気持ちが残っていた。

「うーん」とうなりながら自分の書初めを見ると、向こうで右手にマヒが残る人が、左手に筆を持って書いているのが目に入った。見るともなく見ていると、力強い線が白い用紙の上に鮮やかに踊っている。私の目は次第に熱を帯びてきた。

その日、家に帰ると思い切って左手で筆を持って書いてみた。すると、私の六十年間の生活で知らなかった、とても味わいのある不思議な字が書けたのだ。思わずハッとした。

「これは昔の森山志郎の字ではない。全く別人である森山志郎の字だ」
それまでは、失った右手の機能を回復することのみが私の目標だった。でも、目の前には私の知らない未知の世界が広がっている。これを開拓すれば、全く新しい世界が開けていくことに気づいたのである。

「うん、これだ。この方向に、私に用意された世界があるんだ。右手の価値にこだわってはいけけないのだ」

私は、新しい自分の書体を作るなど、これまで夢にも思ったことはなかった。

そこで、三月に行われる障害者の文化展「ふれあい広場」には、左手で書いた作品を思い切って出品

することにしました。ようやく私自身の中で「障害に悩む森山志郎」が消え始め、「新しい一人の人間」が生まれようとしていた。「汝自身を知れ」とは古くて新しい真実の言葉だった。

「ふれあい広場」に作品を出品するや書道の先生に見てもらいたくて、早速、土屋朱堂先生にお願いをした。「森山さんは左手だから、一つ隷書をやってみるか。隷書だと筆を逆筆に使うから左手でも無理がないかもしれないよ」

作品をこらんなった先生は、「隷書」という未知の分野があることを教えてくださった。三月の泉睡会報に、「あなたもお習字を習いませんか」と土屋教室での仲間を募っていたので、思い切ってその仲間に入れてもらった。週に一回、二時間の教室だったが、私はやる以上徹底して取り組み決意で「入門五百時間訓練」を実践した。それは、なんでも入門するときは、五百時間くらい集中して訓練を続けると、入門に必要な水準の技能を修得できる、ということである。毎日、三時間の練習を休まずに続けると、月に九十時間だから、六カ月がめどだった。

暑い夏の間は、先生に指示された『曹全碑』と『礼器碑』（いずれも、優れた漢碑で、隷書の代表的な手本となっている）とを繰り返し繰り返し書いていき、それぞれに特色のある書体と筆使いを学んだが、左手で字を書くことには、やはり乗り越えるべき幾つかの障害があった。

左手の力は比較的弱いのに加え、病気のために何もしない間に、その筋力もぐんぐん低下していたのである。筆に十分に力が入らず、筆使いをコントロールすることができない。当然のことながら気に入った線が一本も引けないし、隷書の特徴である豊かな右払いを書くのがむずかしかった。筆の持

ち方にもいろんな方法があることを知ったが、本には片マヒの弱い左手のための筆の持ち方など書いてない。自分で工夫して見つけなくてはならないのである。長い試行錯誤のあげくに、ようやく力の弱い左手で筆を持ちながら、力のある字を書くために小指の力も動員する、独特の持ち方を自分なりに考え出した。ところが、今度は筆先に力を入れて筆を浮かして書くと、腕の力が弱くて筆先が自由にコントロールできずに、筆先で紙を押さえつけてしまうことになった。こうした種々の障害を訓練で解決していきながら、少しずつ筆先で字が書けるようになった。

また新しい筆を下ろすときに、私が困っているのを見て、西村先生が筆の穂先を軟らかくもみほぐしてくださったことがあった。片手に筆の軸を握り、もう一方の手で筆先を自分で硬い筆先を使えるようにする簡単な動作だった。しかし家に帰り、その日使った筆の手入れを自分でしようとすると、これができない。水道の蛇口に筆先を突き出して洗おうとしたが、右手が使えないので筆先が水にぬれるだけである。しかたなく今度は洗面台の流しの面に筆先を押しつけながら水を流し続けた。十分だけれど多少は墨がとれるが、筆先の傷みが気になってきた。

次にはコップに水を入れて筆を一时间ほど浸しておき、墨がとけ出してから洗い流した。残念ながら、こんな不完全な方法でやるうちに筆の芯に墨がたまってくるのがわかった。

どちらにしても、毎日毎日「この右腕が伸びて右手に筆を持って洗えるといいのに」と思いつつ筆の手入れをしていたところ、その思いが日常生活にも影響してきた。たとえば風呂に入ったとき、自然に右腕の固い筋肉をもみほぐしながら少しでも前に伸ばす運動をしたり、肘を屈伸する運動の量をふ

やしていたりしたのである。

平成二年の夏には、毎年秋に行われる区民文化祭への出展をきめ、先生に選んでいただいた「弄花香滿衣」という禪の語録からとった言葉の隷書体を連日三時間以上練習した。

未知の能力の発見

会場の片隅に飾られた作品の前に立ったとき、私の胸は大きくふくらんだ。もう障害者を卒業した、もう一人の「手足が少し不自由な森山志郎」に出会うことができたのである。

私もし、右手が自由であれば、決して見えなかった世界がそこには広がっている。六十歳の還暦になって、私の中に自分が知らなかった能力が眠っていたなど、信じられないことだ。このでき事は、人間には幾つになっても学んで伸ばす能力が眠っていることを教えてくれたのである。

年が明けると習字の練習も軌道に乗ってきて、それまで半紙よりも大きい紙に筆で字を書いたことのない私が、大きな広い条幅に「麗日発光華」という隷書体の大きい字を書くことにした。筆も今までのものよりも一回り太い筆を使って、毎日、練習に打ち込んだ。

そんな練習に明け暮れていたある日、私は洗面所の前で「あつ」と叫んでしまった。私の右手はあたりまえのこととして、筆を握っており、その腕は水道の蛇口の下に突き出されて、左手はその筆先を慎重にもみ洗いしているのではないか。退院して五年間、どうにも役に立たなかった右手の指が筆を握り、その手を前に出しているのだ。

このときの作品は、平成三年三月に行われた区内の障害者の作品展「ふれあい広場」に掛軸に表装して出展したが、この作品作成の裏にはだれも知らないこんなうれしいことがあったのである。

このでき事は、リハビリとは、訓練教室に行っただけ行うものではなく、日常生活の中でも進めることが大事だということを私に気づかせてくれたのである。

確かに、平成三年になって以来、私の右手の機能回復は順調であり、食事のつど、右手に箸やスプーンを持たせたり、習字の練習がすんでも、ときおり右手に筆を握らせたりしながら毎日の生活の中で筋肉を強くしてきたが、今回のようにドラマチックともいえる効果は期待していなかったものだ。

この結果から見ると私がつけてきたリハビリの歩みは、それほど見当はずれではなかったのかもしれない。

まず毎日の生活は妻の介助を受けながら出発するが、いつまでも「(……をして)くれない族」では、奪われた自由を取り戻せないだろう。機能は、毎日の生活に必要な範囲で、回復していくように思える。だから、私の生活がテレビを見るだけだと、その範囲でしか回復しないに違いない。しかし生活の中にあるいろいろなものに出したいと思えば、その欲求が新しい機能の目を覚ましてくれる。

これをさらに文化的な面にまで広げ、人間として豊かな生活が送れるようになりたい。今はまだ、水準の高い文化活動を行うまでの機能は回復していないが、目標として持ち続け、努力していくべきだと思っている。

そのとき妻は

足も手も、実際に仕事ができるようになるまでには、いろいろな訓練をして小さな筋肉まで鍛えてまいります。特に、細かく小さな筋肉と骨との組み合わせでできている手のひらの訓練は、ほんとうに時間と根気が必要です。ペンで字を書くことは、最高技術を要する仕事なのだそうです。

右手でお食事ができたとき、「おいしかった？」と尋ねました。「味が違ったよ」との返事、満足そうな顔でしたから、きつと、ほんとうでしょう。

そして、もう一つ、よいことがありました。戦争中は、早食いが生残りの条件だったとか、夫もそれに倣って「早く食べることは天性なのだ」とばかり、どんなに心を込めて作ったお料理でも、十分とたたないうちにすべて胃袋に納めていました。

でも左手で食事をするようになると、しばらくはゆっくり食べていたので、私も安心して食事ができました。しかし、最近、それもじょうずになって、また、私より早く食べ終わるようになりました。

夫が右手で食事をするようになったのは、私が、「もう少しゆっくり召し上がったら？」と言った矢先でした。

これからしばらくはまた、私もゆっくり食べられるので安心です。この

次、私が夫より遅れるようになってしまったら、今度は文句を言うどころか、心から喜ばなくてはならないでしょう。早くそうなって欲しいと念じています。ただし、以前のような超スピードは困りますけれど。

右手で字が書けるようになることは、今の夫の大きな夢なのだと思いますが、いま書いている左手の隷書の字は、右手で書いていた以前の夫の字よりも、私ははるかに好きです。この練習は毎日三時間以上、そのうえ、本を見て一字一字を分析的に研究しながら練習するのですから、「もう負けたわ」と思わず叫んでしまいました。会社の仕事も、このように取り組んでいたのかしら、と以前の夫の仕事振りの一端を見る思いがします。



左手で隷書を書くという新たな試みに成功し、地域の展覧会へ出品する。